

# 六 花

月刊俳句雑誌りつか  
chairman yamada rokko  
secondary chairman &  
the editor in chief kotori  
designed by little bird

9月号

2008

あ 天の川生いく野のの空を割りにけり  
き 木を伝ふ雨水に雨蛙あまかわずかな  
の のんびりと墓洗ふのも久しかり  
た 田の神を送る音なり落し水  
の 軒先に懸かかり初そめたる盆の月  
い 椅子きし軋まむ夜風に夏を惜しむれば  
な 流れゆく音美しや揚あげ花はなび火  
ほ 焰ほむらより茄子なす転まがれる靈たま送おくり  
の 乗合のバスに西日の差し込める  
い 今し方ぶ葡どう萄も貫らひしところなり  
ほ 穂ほ芒すきの折りやすき箇所探さぐりをり  
の 野の分わかな草屑浴ぶる無縁仏  
と 通りけり精靈舟しやうりようぶねのくぐる橋

ま 豆畑 初はつあき秋の風揺れゐたる  
を 惜しみつつ菓子を食ふなり地藏盆  
あ 青き茎の葡萄ぶどうを妻は選えみにけり  
ら ラヂヲ体操あくび咏こらへず帰りけり  
み 短夜みじかよの水のごとくに明けにけり  
わ 湧水に浮かべる挨ほしり吹きにけり  
が 硝子がらすより硝子工房へと西日  
こ 蝙蝠こうもりを銜くわへて猫のまんまる眼  
ろ 櫓の音の俄にわかに止やみぬ霧の中  
も 桃の実の下に落ちある蟬の殻から  
て 照り返す軒の波紋の秋めける  
は 浜風の渡れる夜更け盆の入いり  
つ 月涼し精霊舟を抱き集つどひ

ことり

あ あさがほの髪ひだゆるやかに萎しおれけり  
き きりもなく夜を飾れる虫むすだく集  
の 野を渡る風に秋しゅう冷うれいかすかなる  
た たくましき青栗の実のつき初はつむる  
の 呑み干せし碗にまつはる濁にごり酒  
い 蚊の名なごり残か搔かきつつ夏を惜しみけり  
な 林道を葛くずの茂りてをりにけり  
ほ 穂をたわめ稲田の稔みのりゆきにけり  
の 鋸のこぎりを研ぐや澄みたる水の側  
い 入り乱れながらひとつに芒すすきはら原

ほ 穂先より熟れ初めぬたる稲田かな  
の のびやかに踊る指先夜の秋  
と 床の間にちりばめしままこぼれ萩  
ま 待ちながら 瞼閉づれば 萩の声  
を をみなこそ花野にふさはしかりにけれ  
あ 秋 裕白き 伊達 衿 選みにけり  
ら 洋燈置き寝ころぶ 浜辺夜の秋  
み 水澄むやすべてを底に抱きとめて  
わ 碗ことりことりと並べ 愁思なる  
が がなり声沸き立ち祭始まれり

# 五月来る海は光のほかになし

松本文一郎

大<sup>おお</sup>路<sup>ろ</sup>の蔭<sup>かげ</sup>に河童<sup>かどう</sup>の氣配<sup>きはい</sup>あり

空<sup>くう</sup>青<sup>せい</sup>く代<sup>しろ</sup>田<sup>た</sup>の続<sup>つづ</sup>きみ<sup>み</sup>たるかな

薫<sup>かお</sup>風<sup>ふう</sup>や石<sup>いし</sup>に遊<sup>あそ</sup>べる親<sup>おや</sup>子<sup>こ</sup>亀<sup>かめ</sup>

水<sup>あめん</sup>馬<sup>ばう</sup>畦<sup>あぜ</sup>へ飛<sup>と</sup>び出<sup>で</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>たり<sup>り</sup>けり

ごがつくるうみはひかりのほかになし

五月の海には光しかないと言いつつ、切った潔さが実に力強い。海は水、という事実を光が消し去ってしまうという表現による、文芸の真実で以て読者を説得してしまう強い主観写生の句である。この句、例えば「聖五月」などとしたらだめで、五月来るだからよかった。写生とは事実だけを写し取る。しかしそれだけでは報告に終わる難しさもあるが淡々と詠めばよいのである。

つくり滝段ごとに泡生まれけり 永田 勇

にわか雨日傘で避けてをりにけり

黒南風くろはえに木の葉の雨滴うてきこぼれ落つ

己が道行くところなりあめんぼう

梅雨晴間ゆつくり漕こいでゆくボート

つくりだきだんごとにあわうまれけり

つくり滝の様子をしつかり写生している。自然の滝には無いところを掴んだ。これこそだれも見えていて気づかなかった事を発見したもので、まさに意外性の作品である。一見地味な句であるが、邪心なくしつかりと誠実に写生している。今回は夢風撰が三句出た。六花創刊以来初めてのこと、秀句に出会えるのは俳人にとって当に仕合わせな出来事。

# 足先に光をつかむあめんぼう

田尻 勝子

ジャンプ傘バサツと開き梅雨最中

緑蔭に座る所のなかりけり

夕焼が如雨露の口よりほとぼしる

厨に一つこぼれし梅の主張かな

あしさにひかりをつかむあめんぼう

水馬をこのように詠んだ作品は未だ無い。この句は説明するまでもなく、「光をつかむ」という擬人化が事実を超越してしまった。田尻さんは三位ながら今回で夢風撰四度目。いつも田尻さんを評して「天才」というが、そうとしか言いようがない。田尻さんの作品は驚くほどの当たりはずれがあつて、小さな添削は無駄だと思つている。だから辛抱強くホームランを待つのだ。

父の日

梶浦玲良子

蜘蛛くまの巢ねの未完むげんに終はる 爪つま楊ま枝うじ  
 麦ばく秋しゅうの風かぜやたかだか鷺さぎ歸かえる  
 来き年ねんも一度いちど父ちちの日ひ山やまに父ちち  
 蟬せみの穴あな同どう窓まど会かいの通とほ知ちくる  
 免めん許じょ用よう写しゃ真しんを撮とりに羽は抜ぬけどり鶏どり

青山河

木内美保子

流ながれては又また戻もどり来きる 困こまひ 鮎あゆ  
 田いの神かみや揺ゆれて溺おぼるる 余あまり 苗なえ  
 手てに乗のせて螢へい山やま河がの匂におひあり  
 子こを負おふて猿さるの消きえ行いく 青あお山やま河が  
 雨あめ続つく 小こ径みち塞ふいで 竹たけ似にぐさ草くさ

せつじゆしゆう  
雪樹集

たんぽぽ

K O K I A

春禽しゅんきんの声追うてゐる眼かな

たんぽぽの絮わたのやうなる仔猫かな

鯉こいのぼり 幟のぼり泳げる目玉光りけり

嬰や上げしあとをゆるりと菖蒲しょうぶの湯

水音の中より燕飛び発たち来く

螢 武田 美雪

ため息のやうに螢を包みこむ

緩急を自在に利かせ雨蛙

去勢されしカサブランカや梅雨に入る

梅雨つゆ夕ゆ焼やけ黒雲の下発火せり

夕ゆ立だち後あと飛び石を避け人を避け

# 六花集

六甲選

廣瀬 佳織

日の光眼に集め羽は拔ぬけ鶏どり

羽拔鶏風の向こうで騒ぎけり

羽拔鶏団子のやうに集まれる

訪たずねたる我いぶかしむ羽拔鶏

羽拔鶏扉の蔭に隠れをり

久永 つう

新しん緑りよくや旅の思ひ出また一つ

城深き静けさに入り朧おぼろなる

牛の背を撫なでて春風わたりけり

朝市に並ぶ山菜北の春

山藤や線路に残る汽車の音